

ふじがわ

町のメモ

昭和62年2月1日現在	
人口	16,944人
増減	+20人
男	8,364人
女	8,580人
世帯数	4,423世帯
面積	31.09km ²

富士川町 総務課

2月号 昭和62年2月5日発行

No.307



よみがえった
ドンド焼き!

町のことしの目標
「健康な心とからだだけで住みよい町に」

おもな内容

- 2～3ページ 明日を担う225人はたちの旅立ち
- 4～5 町のわだい…県芸術祭俳句の部で望月さんが芸術祭賞を受賞、消防団出初式が盛大に、祝成人駅伝競走大会で北松野二区チーム優勝
- 6～7 社会教育あれこれ、町の昔ばなし伝説
- 8～9 戸籍の窓、短歌会

1月14日、木島区の河川敷グラウンドで百数十年ぶりに「木島のドンド焼き」が、地区のPTA、子供会、ソフトボール愛好会の主催により復活され、大勢の人たちが参加しました。

この地区では、昔お社の前でドンド焼きを行った際、火災が発生したためとり止めとなったといわれ、これに代わり「投げ松明」を盛大に行ってきました。

他の地区では、年中行事として子どもたちの楽しみの一つとなっているため、同地区でも今年から行われることとなりました。

明日を担う 225人はたちの旅立ち

「第三十六回富士川町成人式」が、1月15日の「成人の日」に先がけ、1月4日（日）中央公民館で、新成人者二百二十五人の約七三パーセントにあたる百六十五人や来賓が出席し盛大に行われました。式典では、まず常葉雅文町長、坪内伸浩町議会議長、金指恭三教育委員長から新成人者にお祝いの言葉が贈られ、続いて新成人者を代表し、高橋俊彦・望月亜希子さんが成人者の言葉「はたちに思う」を力強く述べられました。

式典終了後には、歌やピアノ演奏のアトラクションや地区別の記念撮影が行われました。

その後、新成人者は、ロビーなどで友人や恩師との輪をつくり、なつかしうに親交を深めながら、はたちの春を喜びあいました。

はたちに思う



高橋俊彦さん(上町)

本日、私たちのためにこのような盛大な成人式を挙行していただき、まことに感激にたえません。心よりお礼を申し上げます。

成人式を迎えるということは、さまざまな権利を獲得する



式典風景

と共に、重大な義務も課せられることであると思います。戦前においては、この義務は徴兵検査のように明白な形で示されるものがありましたが、今日では具体的に示してくれるものがない、「社会的な責任」などという抽象的な言葉しか見つかりません。このように考えていくと、成人したからといっても、権利の獲得のみが先に立ってしまい義務の重大さが見えにくくなります。しかし、実際には、それぞれの立場は逆であり、この「社会的な責任」を果たすことほど



望月亜希子さん(南町二)

りにも快適に過ごした学校とは異なり、社会の中で一体何ができるのだろうと不安になります。

今日の社会は、科学技術の進歩により、テレビ、車など自分の思い通りになる環境に囲まれ便利になりました。しかし、人は人間を通して親と接しながら現実を体験して、愛情や憎しみといった人間的感情が成就されていくと思うのですが、子ども

難しいことではないのではないかと、現在の私には思えてなりません。例えば、自分の行動ひとつをとってみても、今まではそれほど考えたものではな

く、あやふやな、思うがままの単純な行動であった面が多くありました。ところが成人した現在では、その行動に責任が絶えず付いてまいります。失敗した

からというだけで済むものではなく、その失敗や失態に厳しい社会の目が付いているわけです。私はまだ学生であるために、直接厳しさを感じたわけではありませんが、すでに社会の荒波の中で生活している方々には、社会的な責任というものを数多く感じておられることだと思います。しかし、私たちはまだ社会的には一人前ではなく、これからも数多くの失敗をしたり、また悩むことも多くあることだと思います。その時には社会人としての先輩の方々にお教えを請い、また活を入れていただき、正しい道を進みたいと思います。

現在の昭和60年代は、無気力、無感動、暗黒の時代などといわれておりますが、このような時代だからこそ、私たちは胸中に、富士川の清らかな流れと、何事にも微動もしない富士山の雄大さを秘めて、来るべき二十一世紀に向けて、羽ばたいて参りたいと思います。

最後になりましたが、ご出席いただきましたご来賓の皆様方をはじめ、諸先生方、そして、ここまで私たちを育ててくれた両親に心からお礼を申し上げます。成人の誓いいたします。

二十歳という、自分の行動に責任を持ち、社会人の一員として正しい判断が要求されるといわれますが、実際に二十歳になり、私自身がまだ学生ということで、社会がどうであるかなどということはよくわかりません。しかし、学生の間は、学生生活を充実したものにしていく私なりにやってきたと思います。

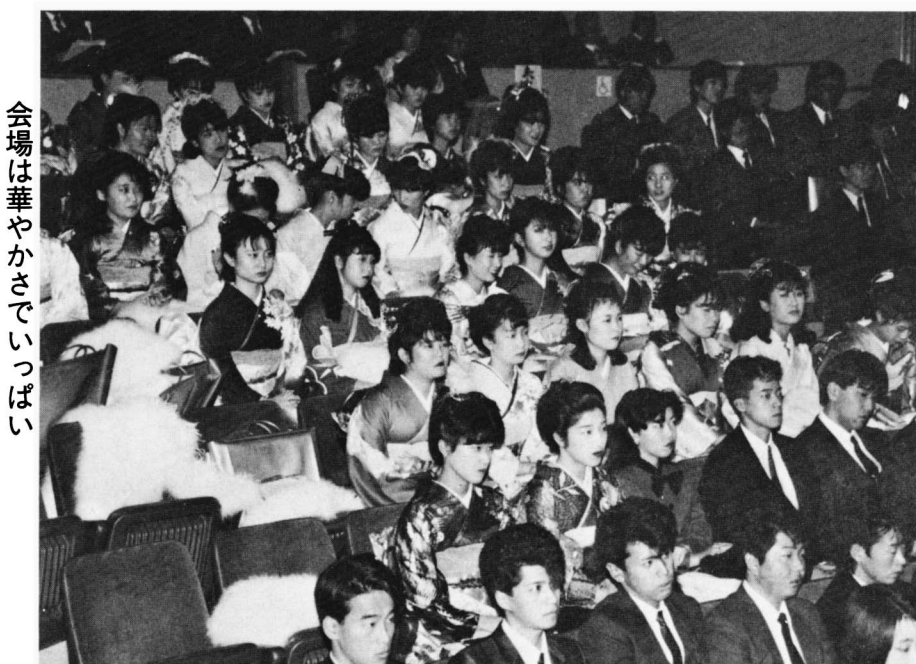
私は、子どもが大好きで、高校の時幼稚園教諭になろうと決意し、現在大学では児童教育学科に学んでおります。幸い念願がかない幼稚園教諭として就職も決まり、心新たに頑張っております。学生生活では素晴らしい友人たちができ、私にとってこの二年間は大変意義があったと感じています。

しかし、大人としての権利が認められる一方、学生で、しかも二十歳になりたての私はあま

は人間を通して親と接しながら現実を体験して、愛情や憎しみといった人間的感情が成就されていくと思うのですが、子ども

のうから機械と過ごす時間が増大し、機械を通して現実を習得していく育ち方が多くなるとすれば、人は思考力を失い、人間の価値感がどう問われていくのか困難になっていく社会になるような気がして、これから生きていく上で、しっかりと

のかなど、いろいろな問題にも全て自分が考え、苦しみ、悩み解決することができず、適確に判断できるためにも視野を広げ、豊かな情操を養い、社会人として人のために思いやりと真心をこめて社会に役立つ人と



会場は華やかさでいっぱい

県芸術祭俳句の部で 望月さんが芸術祭賞を受賞



望月 隆さん (64)
(大北町)

第二十六回静岡県芸術祭文学部門俳句の部に応募された望月隆さん(俳号時雨)が、同部の最高賞にあたる芸術祭賞に選ばれ、1月17日県庁で行われた表彰式で、県教育長から賞状とブロンズ像を受賞されました。

受賞された望月さんは「昨年6月、初めての海外旅行として中国へ出かけた時、大自然の中

県家庭婦人海外派遣団員として 深澤さんが北米諸国を研修訪問(その二)



深澤美智子さん (39)
(新町本町)

先月号に引き続き、静岡県家庭婦人海外派遣団員として北米諸国を研修訪問された深澤さんに、カナダの見聞記を寄稿していただきました。

10月初めカナダのケベック州

を訪れた私たちは、遠々と続く国の象徴である楓の美しい紅葉やカナディアン・サンセットの素晴らしい景色を眺めることができました。

ケベック州は、カナダで唯一フランス語を公用語としており、数年前から標識や観光パンフレットには英語が使用されるようになったといっております。

州民の生活水準は世界第九位

を占めており、これは広い土地から産出される天然資源のおかげでしょう。欧州を思わせる落ち着いた町並には、ケベック市内だけでも百以上の教会があり、州民の九割はカトリック信者ともいわれています。

これらの教会を中心にボランティア活動が行われており、活動に参加することでコミュニケーションの場を得たり、人のために奉仕する精神は、その人の人となりを表わしています。

州政府関係者との意見交換会では、特にコミュニティ・レベルの婦人に対するサービスや増加する老人対策など、わが国でも直面している問題を中心に話し合いました。

グランメール市では、病院機能を備えた「ホワイエ・グランメール」という老人ホームを訪れました。六十五歳以上の老人五十三人が入居しており、家庭的でいきとどいた介護がされていました。社会と隔離しないためと、自由に家族と面会できるよう住宅街に建てたという所長さんの説明がとても温かく印象的でした。



グランメール市民と(上)ホームステイ先の婦人と(下)親交を深める深澤さん



最後に、二週間と短い期間でしたが、ここに書き尽せない程の貴重な体験の数々でした。

祝成人駅伝競走大会で 北松野二区チーム優勝

快晴の1月4日、はたちの春を祝う「第二十三回各区対抗駅伝競走大会」が、第二小学校をスタートし、中央公民館をゴールとする町内一巡(約十一・七歳)のコースで行われました。

ことしの大会には九チームが参加し、出場した選手は沿道で応援にかけつけた町民の盛んな声援をうけながら力走しました。

その結果、北松野二区チームが健闘し、前回の記録を大幅に更新し、みごと優勝しました。大会の結果は次のとおりです。



優勝した北松野二区チームに久保田会長から表彰状が

- 優勝 北松野二区チーム (三十八分二十三秒)
- 二位 宮町Aチーム (三十九分十七秒)
- 三位 南町一・二区チーム (四十分五分)

あたたかい善意ありがとう

「みんなそろって明るなお正月を」をスローガンに、昨年12月いっぱい歳末助け合い運動が行われた結果、みなさんから次のようなあたたかい善意が寄せられました。

●昭和61年歳末助け合い運動募金状況

- 一般世帯(三十二区) 八十四万六千三百円 団体(七十七団体)
- 支援者(十三人) 十万五千四百円
- 総額 二百二十三万八千九百七十七円
- 物品 雑布 五十枚
- ◎募金はこう使いました
- 町内低所得世帯・在宅障害者などへ(八十一人) 八十八万一千四百円
- 施設及び入所者(二十五ヶ所・三十三人) 二十八万八千円
- 病院及び入院者(十一ヶ所・三十人) 二十万五千円
- 町内五団体・その他へ 八十六万四千五百七十七円

町、庵原三町連合出初式が盛大に

1月7日(水)午前7時30分から町立第一中学校校庭で、町消防団(久保田敏男団長・団員百二十七人)の出初式が、引き続き、午前9時から蒲原町立蒲原西小学校で、消防車十八台、消防団員・消防署職員三百四十人が出場し、庵原三町消防連合出初式が盛大に行われました。

町出初式では、新入団員や昇進団員の辞令交付などが行われ、連合出初式では、長年にわたり消防団活動などに活躍された団員や団体の表彰が行われた。

昇進団員

()は旧職

- 第二分団 班長 佐野 晃正(団員)
- 第四分団 副分団長 錦織 務(部長)
- 部 長 和泉 欽也(班長)
- 班 長 小林 一雄(団員)
- 班 長 木伏 克之(団員)
- 第五分団 部 長 佐野 貞利(班長)
- 班 長 阿部 光男(団員)

特別功労章

- 望月 勲(坂下)
- 望月 里志(新町)
- 功 勞 章 齊藤 善計(小山)
- 塩川 和美(清水町)
- 四十年勤続功労章 久保田敏男(清水町)

町長表彰(感謝状贈呈)

- 町長表彰(感謝状贈呈) 相生町区自主防災会



堂々の車輛行進

まちの

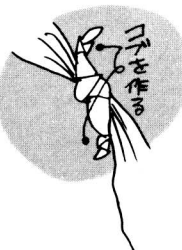
わだいの

火事の恐ろしさは、経験した人にしかわかりません。炎に直接包まれなくても、有毒ガスを含んだ煙にまかされると、体が動かなくなってしまいます。火事に遭っても落ちついて行動できるように、避難の仕方を覚えましょう。



▶熱気が強いときは、毛布やシーツを水にぬらして、頭からすっぽりかぶって脱出する。また、足を保護するために靴をはく。ない場合は靴下を。

▶シーツなどをつないで、ロープの代わりに使うときは、結びめの端にもうひとつのコブを作っておくと安心だ。ただし、あまり高い所からだると転落して死亡したりケガをすることがあるので十分注意を。



こんな行動はやめよう

煙が充満すると、極端に視界が悪くなる。避難口を確かめなくて逃げまどうのは物につまずきケガをすることがあり危険だ。



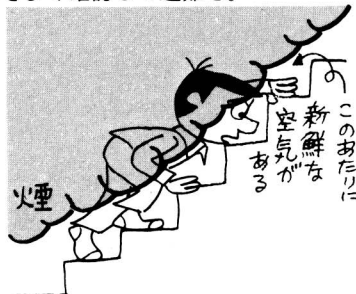
火事場からの脱出

親子で挑戦！ 野外生活の知恵 サバイバル入門

正しい脱出方法

煙りは上から下へと満ちてくる。また煙の中には有毒物質が含まれている。次の点に気をつけて脱出すること。

▶下の方は、視界もよく、比較的新鮮な空気が残っているの、姿勢を低くして、避難口をよく確認して避難を。



▶煙の微粒子などを吸わないようタオルやハンカチ等で口や鼻をおおい、あまり深い呼吸をしない（できればタオルやハンカチはぬれているとよい）



▽社会教育あれこれ△

教育雑感

教育論議が花盛りだ。教育の爆発現象という人もいる。人集まれば、家庭教育だの生涯学習だのとまことにぎやからだ。教育という言葉がごく簡単に使われる時代になった現われであろうか。

この風潮の中で気になることがある。それは、例えば青少年問題を考える時、単なる世代論に終始しやすいことである。

「昔はこうだった」とか「俺達の若い頃は」に代表される郷愁にも似た世代論ではこれからの教育問題には必ずしも当たらないように思える。

なぜなら、自分の過去や体験の枠からぬけ出さないでいて、まるでSF小説の如き時間の流れの逆行を試みたり、タイムトンネルをぬけ出して今の青少年をそこに置いて、あたかも自分と共通項が出来たかのような錯覚に陥って話が進むという大変危険な落とし穴があるからだ。

少なくとも今の時点は過去

に比べ物的には最高の時であることは疑いの余地はないし、多少の上下動はあっても、戦後四十余年、特にみじめな体験もなく確実に良好な発展を遂げってきた。

教育の世界でいえば、貧しさからの脱却、豊かさへのあこがれの教育であった。それが、最高の時点となった今、状況は一変したのである。例えば、テレビや自動車への反応はかつてのそれとは比較にならないほど変容している。この変容した現実への対応こそが論議的にならなければならないであろう。

これまでの経験、体験からの重みは今の子どもにはきわめて重要であるが、豊かさの中で経験しなくてはならないことを経験せず、体験しなくてもいいことを体験してしまつた今、単なる世代論ではなく、新しい価値観の確立とその観念に立ったまったく新しい教育の技法の開発が必要ではないだろうか。

家族で話し合おう 図解交通安全

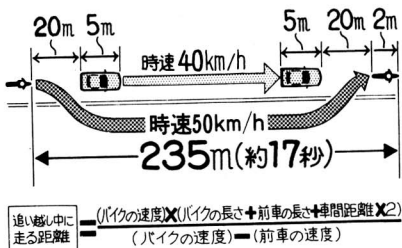
バイク編 追い越し

「追い越しながら、アツという間にできるさ」などと思っているライダーはいませんか。高速で走っているときや追い越そうとする前車との速度差があまりないときは、意外に時間がかかり、長い距離が必要になります。

時速四十キロメートルで走っている車を二十メートル後方から時速五十キロメートルで追い越し、二十メートルの差をつけるためにはなんと二百三十五メートルも走らなければなりません。時間は約十七秒もかかります。(図参照)

これらの数字を見てもわかるように、曲がり角など対向車の

① 追い越し禁止区間でないか
② 対向車はないか、対向車との距離は十分か
③ 追い越したあと、もとの車線に戻るスペースがあるか
④ 前方に障害物はないか
⑤ 前の車、あるいは後ろの車が追い越しをかけるようしていないか



1月の交通事故

人身事故	7件(5)	合計	15件(14)
物損事故	8件(9)		
富士川身延線	5件(3)		
国道一号線	4件(4)		
町道	3件(4)		
県道	3件(3)		
その他	0件(0)		

()は昨年



町の昔ばなし伝説(十八) ドンド焼き

小正月の行事のなかで、火にかかわるものに、ドンド焼きがあります。

正月の歳神様を祀ったカザリなどを各部落に集めておき、14日に富士川の河原や部落の村はずれ、あるいは山の神社前など最寄りの場所、竹を芯にして門松、御幣、書初めに使った紙、白扇などを積み重ねて火焚きを行います。そしてこの火で団子を焼いて食べる習慣があります。

この行事では、火は新郎が付け、去年死者のあった家は、別に作られたもので焼くなどの禁忌があり、これは道祖神、道六神を送る祭り、依代を立てた竹をもち行って火事を除けるとか、この火で焼いた団子を食べれば、風邪を引かないなどと伝わっています。

昔、原方でドンド焼きを休んだところ、流行病に大勢かかり難渋したことがありました。これはドンド焼きをやめたので、道祖神さんが怒ったのだとその次の年からまた始



近年では大北も、また、今年から木島も行われるようになりまし。

戸籍の窓

S 61・12・15～S 62・1・14届出分

(敬称略)

おめでた

区名	氏名	保護者続柄
木島	望月千聡	勤一 長女
相生町	水上卓也	登 二男
相生町	肝付真之	順一 二男
(S 61・8月号掲載分)		
旭町	吉田 彩	知己 二女
旭町	影山蘭子	勝美 長女
堺町	若月貴代	章弘 三女
新町	内海 絢	研史 長女
四十九町	松村美咲	享 長女
宮町	浅岡美穂	洋一 長女
宮町	太田絢子	眞仁 長女
小池	佐野雅美	好則 長女
大楽窪	五十嵐優人	直人 長男
(S 61・12月掲載分)		
幸町	望月麻里	勝己 長女
東町一	渡邊元也	友由 長男
東町一	宮崎久美子	篤 長女
東町二	天野 瞳	正雄 二女
東町二	天野 望	正雄 三女
東町二	池田さくら	隆芳 長女
南町一	村野亜沙子	俊幸 二女
富士見町	中澤 梢	正己 三女
富士見町	佐野裕紀	雅洋 長男
幸町	望月麻里	勝己 長女
東町一	渡邊元也	友由 長男
東町一	宮崎久美子	篤 長女
東町二	天野 瞳	正雄 二女
東町二	天野 望	正雄 三女
東町二	池田さくら	隆芳 長女
南町二	小林 庫一	七一 長女
富士見町	小林 正義	四八 長女
大北町	望月 英	七五 長女
小池	植松 千代	六六 長女
相生町	清野ゆき代	七七 長女
舟山町	花田ひろ	八九 長女
坂下	植松 秀子	六四 長女
坂下	森本 光夫	六一 長男
新町	長谷川いさ	七六 長女
新町本町	渡邊 鶴枝	六五 長女
幸町	若月 よね	九一 長女
東町二	植松 千代	六四 長女
南町二	小林 庫一	七一 長女
富士見町	小林 正義	四八 長女
大北町	望月 英	七五 長女

かなしき

区名	氏名	年齢
富士見町	佐野浩紀	雅洋 二男
大北町	伊藤沙也加	光男 長女

お母さんの知恵袋

お母さんの知恵袋

JASマーク

飲料水のびんの王冠や缶についているJASマーク、いったい何のしるしでしょうか。JASは「日本農林規格」の略。「農林物質の規格化及び品質表示の適正化に関する法律」に基づく、国の規格に合格した農、水、畜産物を原料とする加工食品につ



1月詠草(天野寛選)

新町本町 深沢千代子
日ごと散る庭の落葉をはきためて童にもどり焼芋を焼く
相生町 藤沼 まん

突風に乗る来しさにわのポリバケツ今朝持主が提げて行きたり
坂下 川口 久代
柏手の首のひびかう氏神の新たな年の石段ふみしむ

小池 土橋 節子
よそおいて友に会う朝アメジスト節くれし指に一瞬戸惑いぬ

本通四 桐谷 静子
元朝の明るく明けしウインドに白百合二つ日に向きて開らく

本通一 望月 録
花の命の在処まもりて曼珠沙華冬枯れの道縁足らしむ

木島 角替千鶴子
子等交り人集まる境内に焚火あかかかと年改まる

宮町 若月 幸江
茜に燃え昇る初日は輝きておろがむ吾に光きらめく

宮町 荻野 敏音
年明けて土耕せば畝の間に生え揃う小麦のみどり明るき

一里塚

「今年は父さんも一緒に歩こう」「お前が望むなら行くよ」とこの修行？ 娘と五十キロハイクに恩きせがましく、またうれしくもなり参加。二十キロまでは「しっかり歩け」と威厳を保っていたが、それも少しづつ変わって、足の裏のママや全身がたまらなく痛み、単調な歩行では我慢できず足踏みなどで気をまぎらす。列からは遅れはじめ、娘が戻っては「大丈夫、大丈夫」。自由歩行になって、あまり惨め

な姿を見せたくなく、「友達に遅れると悪いから先に行きな」と離れ、馬坂を登る頃には日も落ち寒さも加わり「名もないものに出た」と棄権したい心境であつたが、それもかなわず、安易な気持ちで参加した悔みやら十分すぎる苦しみを味わった後半の三時間。これでは日もとつぷりと暮れた中を一人とほとほと先に着いた娘を迎えられたいが、幸いにも娘の同級生数人と合流し、わいわいいながら到着したのがせめてもの救となつたこ

とに感謝している。ありがとう。

おわび

(K・N)

昨年8月号及び12月号「戸籍の窓おめでた欄」で、肝付真之ちゃん、五十嵐優人ちゃんを掲載もれし、また、先月号「戸籍の窓おめでた欄」で、堺町伊東丈陽ちゃんを文陽ちゃんと、新町本町の佐藤順紀ちゃんを東町一と、「俳句空の白井滋賀子さんを白川滋賀子さんと誤って掲載しました。深くおわびし訂正させていただきます。



(婦人会)